

芥川龍之介『杜子春』の世界

―「永遠の少年」の運命―

丹羽 章

目次

- 一 永遠の少年
- 二 杜子春の欲望
- 三 試練と回復

キーワード…完全な自己実現、近代、迷羊

一 永遠の少年

大正九年七月、『赤い鳥』に発表された『杜子春』は、まことに見事な書き出しを持つ小説である。その冒頭の二行に、ある意味において、この作品のすべてが尽くされているということが出来る。その見事さは他に類を見ないほどであると言つてよい。

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。^①（一）

即ち、

もう冬ではなく、かといってまだ夏ではない「春」の

もう昼ではなく、かといってまだ夜ではない「日暮」に、

もう内ではなく、かといってまだ外ではない「門」の下で、

もう子供ではなく、かといってまだ大人ではない一人の「若者」が、

行き場もなく、佇んでいた、というのである。

つまりこの冒頭は、この作品が二つの世界の境界線上で座り込んでしまっている青年の物語であることを、あまりにも鮮やかに開示しているのだ。この若者、「杜子春」は、もう子供の世界で生きることができない年齢に達した青年である。両親が亡くなつてしまつていふ設定もそのことにかかわつていふだろう。〈子供の世界〉には、もう彼の居場所はないのである。しかし、にもかかわらず彼には、〈大人たちの生きる世界〉の中に、自分の居場所を見出し、生きていくということができないのだ。それゆえ彼には内にも外にも、この世界のどこにも居場所がない。居たい場所

もないし、居ていい場所もない。だから、「一そ川へでも身を投げて、死んでしまつた方がもしかかも知れない」と思うのである。彼が死んでしまおうと思うのは、必ずしもただ彼が「悲觀的」な人間であるばかりではない。仮に彼が積極的に「居場所」を探し求めたとしても、今の彼には、この世界のどこにも居場所がないのである。

『杜子春』は「この世に居場所のない」〈大人になれない青年〉が必然的にたどることになる運命を描いた物語である。そのような物語が、大正九年（一九二〇）に発表されているということなのである。杜子春はなぜ〈大人になれない〉のだろうか。冒頭は既にそれを解くカギをも提示している。杜子春が今いるのは、唐の都、洛陽の西の門の下である。彼は草深い田舎育ちの、無学な青年ではない。「繁盛を極めた」都で生まれ育ち、おそらくは相応の教育を受けた都市生活者である。そのことが杜子春にふさわしいと感じられるとすれば、それはなぜだろうか。しかし作品は次いで、より端的に、都市生活と極めて深く結びついた〈金銭〉のエピソードを紹介して、杜子春を杜子春たらしめているものが何であるかを提示するのである。

二 杜子春の欲望

杜子春は莫大な財産を三度にわたって使い果たす。まずは「金持」だった両親の遺産を蕩尽し、次いで彼の前に現れた仙人、鉄冠子の与えた「車にいっぱい黄金」(二)を、それぞれ三年間かかって、二度、使い果たすのである。無限に近い金銭を、湯水のごとく使い果たす。そしてそれを繰り返すというところに杜子春のパーソナリティの特殊性がある。それはいかにも幼児的で、愚かである。そして、魅力的なのだ。大金を湯水のごとく使い果たすというイメージには、われわれを惹きつけてやまぬ快感があるからである。しかも杜子春は、それを三度繰り返し返してなお、全く充たされることがなかったのである。だから彼は六年間たつても変わらない。読者は六年という時間の経過を全く実感できないだろう。「車にいっぱい黄金」を二度にわたって使い果たしてもなお、杜子春は何一つ充たされず、したがって何一つ変わらないままだからだ。六年後、彼が「お金はもう入らないのです」(三)というのは、それがたとえ無限に

近いものであらうとも、「お金」では自分の欲望を満たすことができないということを悟ったからにすぎない。己の欲望の愚かさを悟ったでもないし、断念したのでもない。おそらくそれが鉄冠子の期待したことだったとしても^④。したがって杜子春の特異性の本質は、無限に近い金銭を際限もなく使い果たしてもなお充たされることがない欲望を抱え、しかもその欲望を満たすことにしか生きる意味を見いだせない青年であるということにあると言わなくてはならない。そしてその一点で、彼は六年たつても全く変わっていないからである。

即ち杜子春は、ある欲望を抱えた青年である。そしてそれは「お金」の力によっては充たされることがなかった。なぜならば、「いくら大金持でも、御金には際限が」（二）あるからである。例えば水谷昭夫氏は、原典である唐代の傳奇小説『杜子春伝』で「三百万」と限定されていた金額が、『杜子春』では「車一ぱいの黄金」となっていることに注意を促され、「つまり費用 三百万」と「車一ぱいの黄金」との間には、芥川にとって決定的な相違があるのだ」と指摘されている^⑤。極めて重要な意味を持つ指摘である。そして大正九年三月八日の日付を持つ「空想」を引用されている^⑥。

僕は貧しい人間である。だから時々大金を得て、自在を極める時を空想する。その場合僕の所謂大金は、何百萬圓何千萬圓と云ふ制限を知らない。唯僕が自在を極めるのに十分なだけの金額である。所が金持ちの空想は、必彼等の所有する金額の制限を受けるらしい。

『杜子春』発表に先立つ事四か月、生前未発表の随筆である。〈金銭〉とは言うまでもなく、我々近代人に、自由と可能性を与えるものである。金さえあれば、欲しいものを手に入れ、行きたいところへ行き、したいことをすることができる。近代社会では〈金さえあれば何でもできる〉し、〈金がなければ何もできない〉のである。我々近代人にとって、〈金銭〉はほとんど〈自由と可能性〉そのもののものだ。だから我々は金銭を欲しがるし、金銭を自由に使うことで、自由と可能性を行使する万能感、〈快感〉を味わうのである。そう考えれば、鉄冠子の与えた「車に一ぱいの黄金」の意味も明らかになるだろうし、杜子春がそれに満足できなかった理由も理解できるだろう。鉄冠子が与えたのは〈無限

に近い自由と可能性」であり、杜子春がそれに満足できなかったのは、それが真に〈無限〉ではなかったからである。「いくら大金持でも、」金銭がこの世のものである限り、「際限が」あるのだ。そして「際限」がある限り、所詮「自在を極める」（傍点丹羽）ことはできない。真に「自在を極め」ようとするなら、〈自由と可能性〉は、絶対無制限のものでなくてはならないのだ。杜子春の必要としている自由もまた、「制限を知らない」のである。即ち杜子春の欲望とは、絶対無制限の自由を行使すること、言い換えれば、〈完全な自己実現〉なのである。

もちろん、それは実現不可能な欲望である。われわれは有限な現実世界に生きる有限な存在に過ぎないからだ。現実世界の存在である限り、あらゆるものが「制限を受ける」。たとえわれわれに与えられた可能性が無限であったとしても、われわれにはその可能性のすべてを生きたことはできない。われわれは己のすべての可能性を完全に生きたという欲望を断念し、有限性を受け入れ、限定された存在として、現実世界の中に居場所を見出していくしかない。それが〈大人になる〉ということなのだと言ってよい。しかし、杜子春はその欲望を断念しようとしないうちに、断念することが出来ないのである。例えば山敷和男氏は、『杜子春』の主人公は「人間の軽薄さを仕方のないものと認め、しかしそれと妥協することもせず、それに堪えることも出来ない」という「人間的な弱さ」から仙人になろうとするのだと論じられている。⁽⁷⁾しかし杜子春は必ずしも〈弱い〉人間だとばかりは言えないし、現実から逃避するためにのみ仙人になろうとするのではない。彼は、己の抱えている、人間である限り実現不可能な欲望を叶えるためにこそ〈仙人になりたい〉と言いつけるのである。そしてその望みを叶えるためには命を捨てることさえも厭わないのだ。〈完全な自己実現〉という不可能な夢に取りつかれた青年は、いまや現実世界を捨て、人間であることを捨てて、〈仙人〉という〈超人〉、言い換えれば〈人でなし〉になろうとしているのである。

杜子春はなぜそのような愚かな夢に取りつかれているのであろうか。周知のとおり、杜子春は仙人になろうとする理由を次のように訴えている。

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辭も追従もしますけれど、一旦貧乏になつて御覽なさい。柔

しい顔さへ見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな氣がするのです。」(三)

ここでは二つのことが言われている。一つは、都会人は、杜子春ならずとも、多かれ少なかれ、自己実現の夢に取りつかれていることだ。だから彼らは金銭に群がるのである。杜子春と他の都会人たちの違いは、〈完全〉であることを求めるか否か、というただ一点のみである。杜子春にとつて自己実現は〈完全〉でなければ無意味であり、したがつて金銭、即ち〈行使しうる自由〉にも際限があつてはならない。しかし合理的で功利的な都会の世人、現世の幸福を信ずる卑小なエゴイストたちの空想するそれは、不本意ながらも、「制限を受ける」のである。

そしてもう一つは、杜子春が取りつかれている欲望、彼がどうしても捨てることができない欲望が、〈条件つき〉ではない愛、代賞を求めない愛、即ち〈絶対無条件の愛〉という、もうひとつの表現を持つことである。無論、〈絶対無条件の愛〉もまた、現実には存在しない。諸氏の指摘の通り、それは求めても得られるはずのない愚かな夢であり、都会の合理的なりアリストたちの最も嘲笑するところのものである。そこに杜子春の幼児性や未熟さを見ることは当然であり、正当である。ただ、考えるべきことは、にもかかわらず、人間にはそのような夢に取りつかれることがありうるということなのである。完全な自己実現という不可能な夢に取りつかれるのと全く同じように。したがつて問題は、そのような愚かな夢に取りつかれる人間とは何か、ということであり、また、そのような人間を生み出してしまふ世界の在りようとは何か、ということ でなければならぬ。そして、杜子春が取りつかれている欲望が、〈完全な自己実現〉と、〈絶対無条件の愛〉という二つの表現をもつということは、この二つの問いを考えるための重要な鍵となりうるのである。

明治四三年(一九一〇)、四五年(一九一二)と、相次いで次のような文章が書かれている。

自分は生れつき自我に執着する男である、されば自分は自我を何物の犠牲にしやうとも思はない。寧ろ自我の為に

何物をも犠牲にしやうと思つてゐる、……（中略）……かく思つてゐる自分は自我の為に働くことを以つて、最も厳肅なる意味における道德家だと思つてゐる。宗教家だと思つてゐる。

武者小路実篤「自分の筆でする仕事」⁽⁸⁾ 明治四三年十月九日付
 自分
 自分は自分を眞んから愛するやうになつた。自分の顔を眞んから美しいと思ふやうになつた。自分は自分程のエラサを持つた人は餘りないと信ずるやうになつた。

自分は自分の愛すべき所を、又エライ所を一生かゝつて掘り出さねばならぬ。

志賀直哉「日記」 明治四五年三月八日付⁽⁹⁾

人にはそれぞれ、固有の可能性が与えられており、その可能性は無条件に〈善きもの〉である。ここではまずそのような考えが前提とされている。「自我」と呼ばれ、又「自分」として自覚されているのは、その固有の可能性であると言つてよい。それゆえ、己の善き可能性（自我）を自覚し、それを生かす事が、即ち〈善〉であると考えられる。だとすれば、己に与えられた善き可能性を完全^①に生かすことができるとするならば、それこそが〈最善〉であるはずである。「自分」（「自分の筆でする仕事」）がここで宣言しているのは、その〈最善〉を実現するために、自分は「何物をも犠牲に」するつもりである、ということだ。もちろんその〈最善〉の実現が不可能だという認識がここに全く欠けているわけではない。それがあからこそ「宗教家」という言葉が選ばれているのだろう。ただここではその不可能性の認識はさほど痛切なものではなく、〈善〉の実現のためであるならばなものにも縛られるつもりはないという（自由）の主張が全面に押し出されている。〈善〉を求める欲望こそが最も人間的な欲望であるのだから、いかなる障害にも負けることなくその実現を最優先する事こそが（人間的自由）なのだという考えが、以後、時代の風潮を形成していったことは否定できないであろう。「白樺」的なものが最も近代^②的（傍点ママ）なるものとして、まばゆくその眼に映じていた⁽¹⁰⁾（石割 透氏）という時代である。そしてそのような中で、次のような恋愛の理想も形成されることになる。

彼は自分にたよるものを要求してゐた。自分を信じ、自分を讃美するものを要求してゐた。そして今や、杉子自身

にその役をしてもらひたくなつた。杉子は彼のすることを絶対に信じてくれないならなかつた。世界で野島程偉いものはないと杉子に思つてもらひたかつた。彼の仕事を理解し、讚美し、彼のうちにある傲慢な血をそのまゝぶちあけてもたぢろがず、かえつて一緒によこべる人間でなければならなかつた。

武者小路実篤『友情』^①五

己の〈自我〉が無条件に肯定されること、ここではそれが〈愛〉と結びつき、求められている。もちろんこの恋愛観がそのまま当時の一般的な恋愛観であつたとみなすことはできない。ただ、恋愛とは男女相互の理想的な自己実現の場であるべきだという恋愛観が一般化していく、一つの重要なエポックを形成したと言ふことは出来よう。その『友情』の連載終了が大正八年十二月、『杜子春』発表はほぼその半年後である。『杜子春』の主人公もまた、かかる時代の風潮の中から生まれ出た存在であることは間違いないであろう。ただ、『杜子春』には、〈完全性〉、〈絶対性〉への非妥協的希求と、それが現実には存在しないという痛切な認識が同時に存在している。それが『杜子春』の出发点である。不可能である、にもかかわらず求めずにはいられない。かくして、一人の青年が、不可能な欲望の実現を求めて、〈仙人〉になろうと試みることになるのである。〈近代的〉な意味で最も〈人間的〉な欲望の実現を求めて、〈人でない〉ことになることを望むのである。そこに『杜子春』の核心がある。いわゆる〈人間的〉自由の矛盾である。

三 試練と回復

峨眉山や地獄での杜子春の修行は、要するに〈人間的〉感情を捨てていく過程である。即ち〈人でない〉になるために〈人間らしさ〉を捨てていくのである。ただここでは、杜子春が、己の欲望を貫徹するために、死すら厭わなかつたといふことのみを再確認しておきたい。〈完全な自己実現〉という彼の夢は、死をも超える欲望、あらゆる限界を超えていく欲望なのである。そしてその、人間の限界を超えていくことに耐え続けた杜子春が、最後に直面したのが、あの、

〈愛を捨てる〉という、〈最後の課題〉だったということになる。

周知の通り、原典『杜子春伝』においても、この課題は〈最後の課題〉となつてゐる。原典の主人公も、杜子春と同様〈沈黙^②〉を課せられている。そして、恩人である道士の仙薬の完成のためにあらゆる試練を耐え抜いていくのだが、最後に、女となり、母となつて、息子が夫に殺されようとした瞬間、思わず声をあげてしまう。結果として仙薬は完成できず、道士は「そなたは、喜・怒・哀・懼・悪・欲については、すべて忘れ去つたが、愛だけは忘れられなかった。仙人の才能は得がたいものだ」と言つて杜子春を人間界に帰す^③（渡辺芳紀氏）という結末となる。つまり〈愛を捨てる〉という課題も、それに失敗するという結末も、『杜子春伝』と『杜子春』は共通しているのである。ただ、周知の通り、ここには決定的な相違がある。まず、母子の立場が逆になつてゐる。杜子春は〈子〉なのである。もちろんそのことには重要な意味がある。そして、多くの指摘の通り、課題に失敗したことへの評価、意味づけが、全く異なつてゐるのである。原典では道士（超越者）は失望し、主人公（人間）は己の失敗を恥じる。失敗はあくまで否定的に評価される。そこにあるのは恩義に答えることができなかつたという道義的恥の意識である。しかし『杜子春』においては、杜子春（人間）は、課題に失敗したことを喜び、鉄冠子（超越者）も、そのことを肯定するのである。すなわち失敗こそが肯定されるのである。そして、それらの核心に、あの〈母の言葉〉がある。それが作品『杜子春』の肝腎を形成している。したがつて問題は、杜子春が〈母の言葉〉に何を見たか、その言葉聞いて、その実現のためには死すら厭わなかつた欲望を、なぜ捨てることができたのか、そして、その捨て得たことを、杜子春はいかなる意味において喜び、また鉄冠子はいかなる意味でそれを肯定したか、それらの問いに答えることでなくてはならない。それらに答えることができれば、杜子春がなぜ洛陽の都に帰ることにならないのかも明らかにするはずである。まずは核心となるあの〈母の言葉〉である。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。」

……(中略)……母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む氣色さへも見せないのです。大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何と云ふ有難い志でせう。何と云ふ健氣な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、轉ぶやうにその側へ走りよると、兩手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一聲を叫びました。……………(五)

《母の言葉》は、杜子春に何を与えたのだろうか。既述のように、《完全な自己実現》という杜子春の夢は、《絶対無条件の愛》という、もう一つの表現を持っていた。ならば、杜子春が母の言葉に見出したのは、その《絶対無条件の愛》だったのだろうか。《母の言葉》は、杜子春が求めていた「無償の愛」^①、《無私の愛》だったのだろうか。もちろんそうではない。酒井英行氏の指摘されるように、杜子春の母の《愛の言葉》は、「お前さへ仕合せになれるのなら」他人はどうなっても構わない、というエゴイズム^②、生々しいまでに人間的な、強烈な執着の言葉そのものでもあるのだ。人間的愛をエゴイズムと切り離すことはできない。そしておそらくそれが、「心根の優しい母親」^③が地獄に落ちている理由である。「人を殺したり家に火をつけたり、いろいろ悪事を働いた大泥坊」^④ 犍陀多も、杜子春の《優しい母》も、エゴイストである点においては程度の差にすぎないからである。杜子春にとって《母の言葉》は、地獄の底でしか聞くことができない声だったのだ。

したがって問題はいまや、母の愛が無償の愛であるか否かではない。問題は、エゴイズムにまみれた、あまりにも人間的な母の愛の言葉の中にこそ、杜子春が本当に欲しかったものがあったことなのである。人間を超えたところではなく、最も人間的なところにこそそれはあったのである。だからこそ、それをそこに見出した瞬間、杜子春は《完全な自己実現》という愚かな夢から解き放たれ、人間であることを肯定し、引き受けて生きていくことを選ぶ者となったのである。それが「人間らしい、正直な暮し」(六) ということであるはずだ。「正直な」とは、人間であることを偽らないこと、人間以上、人間以外の者であろうとしないことを意味すると考えることができる。

では、果たして杜子春が《母の言葉》に見たものとは何だったのだろうか。それを確実に言い当てることは難しいか

もしれない。ただ、確かに言えることはある。それは、杜子春がここで取り戻したものが、自分がかつてほんとうに愛されていたという記憶だったということである。己が確かに愛されていたという事を思い出し、認めえた時、その「愛してくれた者」、〈愛してくれている者〉を目の当たりにすることができた時、杜子春は初めて、「はらはらと涙を落しながら、「お母さん。」と一聲を叫」(五) ぶことができたのである。それは〈絶対無条件の愛〉などという抽象的なものである必要はなかった。生々しい、エゴイズムそのものであるような、人間的な〈母〉の愛の実在こそが、杜子春がほんとうに思い出したかったものだったのである。そしてそれを思い出した瞬間が同時に、杜子春が、あの〈近代的〉な夢、愚かな自己実現の夢から解放された瞬間でもあったということなのである。杜子春は〈夢〉から覚めて、
 〈我に返った〉のだ。

自己実現の夢とは、自分自身の力で〈本当の自分〉になろうとする夢であると考えることができる。そして作品『杜子春』が暗示するのは、それが、己が愛されていたことを忘れてしまった人間、あるいは己が愛されていることを見失ってしまった人間達の抱く夢であるということだった。そのように考えられる。だとすれば、それは〈完全な自己実現〉という近代人の夢が、神の愛を見失い、神に愛されていたことを忘れ、自分が何者であるかを忘れてしまったストレイシープ、迷い子たちの夢であることを示唆するものなのかもしれない。そう考えるなら、鉄冠子という超越者が、杜子春の失敗を肯定したこともよく理解できるし、杜子春が洛陽の都に帰らない、あるいは帰ることができない理由も明らかになるのだ。

洛陽の都は都市である。そしてそれは、この作品にあつては、おそらく近代都市、近代の世界そのものを意味している。そしてそこが、自己実現の夢に取りつかれた小杜子春たちばかりがうごめく世界であつたことも、すでに述べたとおりである。とすれば、そこは今の杜子春の帰るべき場所ではない。しかし、だからといって、ほかに帰る場所があるわけでもない。洛陽が近代都市であるとすれば、杜子春の住む世界はどこであろうと、所詮近代世界でしかないということになるはずだからだ。

〈完全な自己実現〉という夢に取りつかれていた杜子春には、この世界のどこにも居場所がなかった。しかし自己実

現の夢から解き放たれた杜子春にも、やはり居場所はないのである。だとすれば、彼が帰るべき所が「家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐる」(六) 霊山のふもと、桃花源境にしかなかったとしても、それはやむを得ざるころだつたのだ。あるいはそれは、己が神に愛されていることを思い出した人間達に用意された、エデンの園であつたのかもしれない。

注

- (1) 芥川龍之介「杜子春」(芥川龍之介全集 第四卷 岩波書店 一九七七年一月二二頁)。以下本文引用は同全集による。
- (2) 渡辺芳紀氏「杜子春」(『国文学』12月臨時増刊号「芥川龍之介の手帖」学燈社 一九七二年一月二五日 一〇一頁。渡辺氏の指摘は原典『杜子春伝』の主人公との対比においてなされたものであり、それ自体は妥当な指摘である。ただ、後述するように、『杜子春』の主人公が、時に弱々しい消極的な人間として捉えられがちな事には問題があると思う。
- (3) 『杜子春』は大正九年(一九二〇)七月、雑誌『赤い鳥』に発表された。
- (4) 鉄冠子が「眉をひそめた」のは、杜子春の反応が、期待とは全く逆だったからではないだろうか。
- (5) 水谷昭夫氏「繊細な光彩と知的なるものの死」(『死と愛の季節』ヨルダン社 一九七四年一月一〇日 五七頁)。
- (6) 芥川龍之介「雑筆」(芥川龍之介全集 第十二巻 岩波書店 一九七八年七月二四日 一八〇頁)。
- (7) 山敷和男氏「杜子春」論考(早稲田大学『漢文学研究』9号 一九六二年九月初出、関口安義編『芥川龍之介作品論集成』第五巻に再収録 翰林書房 一九九九年七月二八日 九〇頁)。
- (8) 武者小路実篤「三つ(感想)」(武者小路実篤全集 第一巻 小学館 一九八七年二月一〇日 三四七頁)。
- (9) 志賀直哉全集 第十巻 日記(一)(岩波書店 一九七三年一月一九日 五五七頁)。
- (10) 石割 透氏「杜子春」(『信州白樺』47・48合併号 一九八二年二月初出、『芥川龍之介作品論集成』第五巻に再収録 一一五頁)。
- (11) 武者小路実篤全集 第五巻(小学館 一九八八年八月二〇日 八頁)。

- (12) 〈沈黙〉が、夢分析に於いては〈死〉の最も普遍的な象徴であり、さまざまな物語においても同様の意味を持つことは、フロイトの指摘している通りである（たとえば「小箱選びのモチーフ」『フロイト著作集』3 人文書院 一九六九年十二月二五日 二八五～二八七頁）。即ち杜子春に課せられている課題は、〈人間としての死〉を超えることである。

- (13) 渡辺芳紀氏 前掲書 前掲論文 一〇二頁。

- (14) 母親の言葉に「無償の愛」を認める読みは一般的なものであり、そのことには重要な意味がある。ただ石割透氏が「子春に対する無償の愛」（前掲書 前掲論文 一一四頁）と限定されている通り、「無償の愛」の取扱には慎重さが必要である。

- (15) 酒井英行氏 『魔術』・『杜子春』など」（『芥川龍之介 作品の迷宮』有精堂 一九九三年七月一〇日 一二七頁）。

- (16) 越智良二氏は「杜子春」をめぐる種々の疑問」の一つとして「心根の優しい母親が、どうして地獄の畜生道に落ちたりしなければならぬのか、という疑問」を挙げている。（「杜子春の陰翳」『愛媛国文研究』29号 一九七九年二月初出、『芥川龍之介作品論集成』第五巻に再収録 一〇〇頁）。

- (17) 芥川龍之介『蜘蛛の糸』（一）（芥川龍之介全集 第二巻 岩波書店 一九七七年九月一九日 二二七頁）。